本物の漆器の「気持ち良さ」可視化に向けた連携研究

桐本泰一
（輪島キリモト社長）

桐本家は1700年代後半から漆器業、木地業に従事しており、私が大学で工業デザインを学び、企業にてオフィスプランニングに従事してから輪島に帰郷して31年。朴木地業を生業としながら、輪島産地ではめずらしく、木地から漆塗まで一貫して手掛けるようになって27年目である。

私は自ら考え、図面を描き、同年代の職人さん達と一緒に、「木と漆の製品」を産みだしている。全国の工芸ギャラリー、インテリアセレクトショップ、百貨店の和食器売り場などの売り場に立ち、漆、漆器、輪島、輪島塗、輪島キリモトのことを説明している。天然木に、本物の漆を塗り込んだ漆器を、今の暮らしの中で、心地よいものとして使ってもらうためにはどうしたらよいかと常に考えながら動いているが、店頭でお客様に接していると、「高いわね！」「洗い方がわからない！」「しまい方が面倒くさいから使わない！」「熱いモノをいれてもいいの？」「え、洗えるんだ？！」「輪島塗は直せるの？」「そんな話聞いた事がないわ……」このように作り手の思いとは全く違った「誤解」を持っている、使い手の方が多いと実感するのである。これは、「漆器の新しいデザインを考える、カタチ、色を再考する」という以前に、まず、使うと気持ちが良く、心があたたまるものであるということをわかってもらう必要があると感じるようになった。

ヒトの手で作られる工芸品は、自己満足、独りよがりに陥りやすいところもあり、自らが手掛けた、または携わったモノの良さが、「伝え手（ショップ、お店の方々）」や「使い手」の心に響かない事がある。特に日本の漆器は、輪島塗産地だけではなく、日本国内の他の漆器産地でも同様の悩みがあり、「本物の漆器」をわかりやすい言葉にする、伝えやすい表現を探し出す研究が必要だと思い続けていた。

そんな時、金沢大学・松村先生から、「能登の民間企業と連携した取り組みを考えている。ぜひ輪島塗を対象としたい」との話があった。そこで、私が、この現状･課題を伝えたことで、今回のプロジェクトの提案へと発展してゆくこととなった。それは、伝統工芸産地にありがちな「新しいデザイン」「新しい販路開拓」よりも先進的な研究であり、この成果内容を、輪島塗産地で共有し、各工房、作り手がそれぞれの解釈をして、漆、漆器、輪島塗をわかりやすくすることで、これまで漆器の良さを知らなったお客様が新しい「使い手」となり、結果、輪島塗業界の活性に繋がっていくと確信した。

高度成長期やバブル景気の時のようなことは難しくても、この表現が広がることで、ヒトの手によって創られていく工芸品が、長く続いて行くことになり、これまで約500年以上続いてきた輪島塗を今後何百年も繋げていく助けになると確信したのである。

学生のみなさんは、着実なアンケートや、ヒアリング、さらには、実際漆器を持ったり、使って頂いての感想などを通して、色んなデータを出して下さった。それをもとに、「本物の漆器の気落ち良さ」を可視化するための色々な提案、素直な感想を頂き、私たちに見えていなかったことを知ることができたり、仮定していた

ことが確認できたり、とても興味深く、参考になることばかりであった。このわかりやすい言葉を、作り、販売する私たちが充分に理解し、自らの心に昇華することで、これまでに使って頂いているお客様には、より深いご理解をして頂くことになり、これまで使ったことがないお客様には、ほんものの漆器を、この世の中にじんわりと浸透していた「新しい素材」として捉えて頂けるきっかけになると感じる。

若い学生のみなさん（先生方）が、輪島塗に興味を持って、その存続のために一生懸命取り組んで下さったことは、この良き輪島塗を、何としても後世に残したいと思う私たちにとって、何よりの刺激、励みになる。また、この成果は、輪島塗業界のみならず、本物の漆器を作り出す日本国中の作り手、工房、他の伝統工芸産地にも、きっとヒントになると思うので、伝えたいと思う。

モノが溢れて、何が良くて、何が不必要なモノなのかがわかりづらくなっている今だからこそ、人の手、人の唇、人の頬などに響くモノづくりが、人の心をホッとさせ、日々の生活を気持ち良くさせることに繋がるはずだ。作り手の気持ちと、使い手の心とが一体に繋がれば、もう一度日本の伝統工芸品は再生していくと確信するのである。今回、関わって下さったみなさんに、心から感謝の気持ちをお伝えしたい。